

同志社大学神学科の日本西部神学校への 統合拒否と、その際語られた「新島精神」

森 田 喜 基

はじめに

「新島精神」とは何であろうか。

同志社創立 150 周年を迎える 2025（令和 7）年を前に、同志社の歴史を振り返ってみると、「新島精神」は何時如何なる時代においても常に同じものであり、同じように語られてきた、とは言えないということに気づかされる。それぞれの時代の中で、時々の世相や時代背景を反映し、新島襄の精神、またその言葉は「解釈」されてきた。また時代ごとに多用される新島の言葉も違ってきたのである。それは一様に悪いことではない。例えば今日の同志社では「人一人は大切なり」をダイヴァーシティ推進や教育の主眼に据え、語られることが多い。それは新島をロールモデルとして、今同志社がどのような教育的特徴を重視しているのかについて、それを内外に明示することができる大切な言葉である。しかし私が同志社大学また大学院に在学していた 20 数年前に、この言葉を聞いた記憶はなく、「倜儻不羈」をよく目にしていたことを思い出す。

新島の言葉を語る時、それは新島の本意に沿うものであるか、「解釈者」が自分本位の解釈をしていないだろうか、このことを常に意識しておくことは、新島の精神を同志社が引き継いでいくにあたり、必要なことであろう。

本論はそのことを念頭に置き、戦時下同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否を取り上げ、その際に語られた「新島精神」がどのようなものであったかについて検証する。

1. 同志社大学神学部の変遷 余科から戦時下まで

同志社における神学教育は、同志社、そして日本のプロテスタント教会が始まったその時から、ほぼその史上にあった。同志社々史々料編集所編『同志社九十年小史』（同志社、1965年。以下『九十年小史』）には、その草創期から『九十年小史』が編纂された時期に至るまで詳細にまとめられている。神学校の変遷を戦時下まで時系列に並べると図「同志社における神学校の変遷」のようになるが、同志社英学校余科から始まるその歴史には、名称と学制の変遷がかなりあった。しかしながらそれらが違ったとしても、そこで学び、卒業していった者は、同志社で神学を学んだものとして、伝道活動や教育事業、また社会事業などにおいて活躍していったのであった¹⁾。

同志社開校前史については省略するが、「寺町丸太町上ル松蔭町」の仮校舎において1875（明治8）年11月29日「官許同志社英学校」が開校された²⁾。開校当時、教師は新島襄とJ. D. デイヴィス（J. D. Davis）の2人、そして生徒は8名であった。翌1876年にはD. W. ラーネッド（D. W. Learned）、E. T. ドーン（E. T. Doane）、また医師のW. テイラー（W. Taylor）が加わった³⁾。この頃に熊本洋学校廃校に伴い、転入してきた「熊本バンド」と京都で呼ばれる学生たちが入学した。すでに洋学校の課程、すなわち高度な教育を修了していた彼らの学びのために1876年に英学校に余科を設置し、神学や哲学を教授するようになった⁴⁾。

しかし当時キリスト教伝道者を養成する目的で聖書を講義することは許可されておらず、設置された余科の校舎は相国寺門前旧薩摩屋敷の空地に竣工した木造二階建てであり、毎朝の礼拝、諸学科の教授、および神学書の講義もここで行なわれていた。しかし許可が得られてない聖書の講義は、新島の名義の向かい側にあった一軒で授けられ、通称「三十番」教室と称された⁵⁾。余科での三年間の学びを終えた第一回卒業生を1878（明治11）年に同志社は輩出した。卒業生は海老名弾正、不破唯次郎、市原盛宏、金森通倫、加藤勇次郎、小崎弘道、宮川経輝、森田久万人、岡田松生、下村孝太郎、浮田和民、和田正修、山崎為徳、横井（伊勢）時雄、吉田作弥の15名

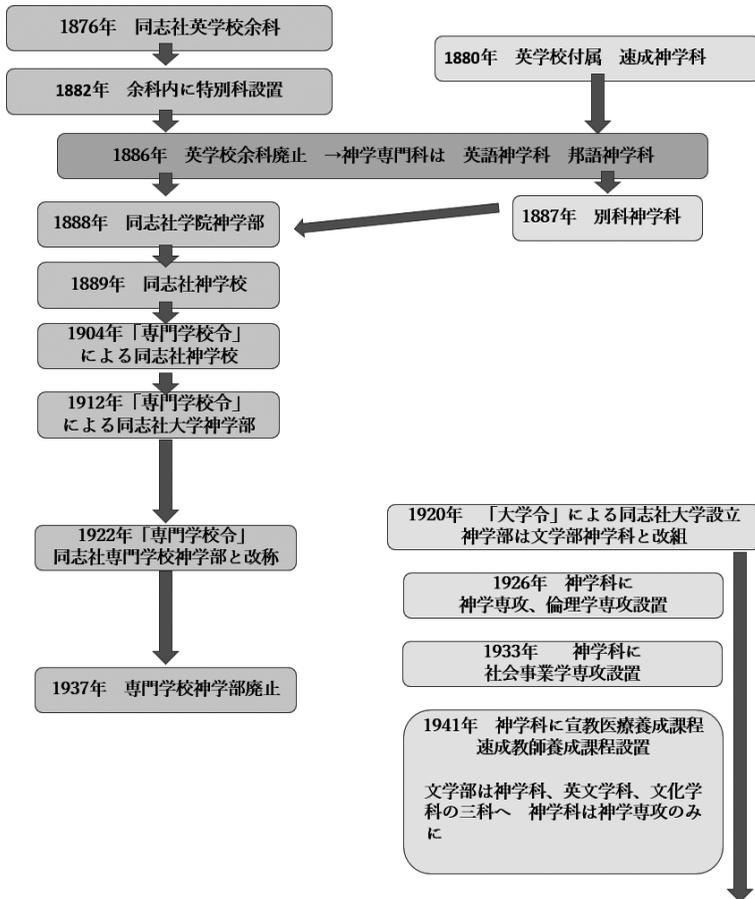


図 同志社における神学校の変遷

であった。彼らは日本における会衆主義教会である日本組合教会だけではなく、日本のキリスト教界において大きな役割を担っていくことになった。その中から卒業後すぐに市原、加藤、宮川、森田、山崎の5名が同志社男女両校の教員となったが³⁶⁾、第一回卒業生の進路の内訳は、教会の牧師となった者7名、学校の教師となった者7名（同志社教員5名を含む）、他更に勉学した者1名であり、神学を学び、教会での伝道牧会や同志社や他のキリスト

教主義学校の教師たちを輩出したのであった。

ここで一つの議論がある。同志社英学校余科は「神学校」であったのか、というものである。それについて同志社内での評価は『九十年小史』において「その歴史は同志社創立の翌年をもって始まるが、創立者新島襄はその創立当初からすでに将来における神学校の建設を考えていた。同志社に熊本バンドの学生らが入学した時に、神学校の歴史は始まるが、彼らは同志社の発展に非常に寄与したのみでなく、新島と共に旧日本組合基督教会の発展に重大な貢献をなすにいたり、したがって日本プロテスタント教会史上に意義ある足跡を印するにいたった。」⁷⁾として熊本バンドが入学した余科から神学校の歴史が始まったとしている。

同志社外の評価はどうであろうか。日本におけるプロテスタント神学校の歴史をまとめた中村敏『日本プロテスタント神学校史 同志社から現在まで』（いのちのことば社、2013年）は、そのタイトルにその評価は明示されているが、その説明としてこのように記されている。「日本における最初のプロテスタント神学校は、どの学校に帰すべきかということになるが、ことはそう簡単ではない。宣教師の私塾と神学校をどこで区別するか、という問題がある。加えてそれぞれの神学校は、自分たちの創立時期をできるだけ早く設定する傾向がある。そこで、神学校の定義が必要となる。－中略－『神学校とは、明確に牧師・伝道者等の教職養成を目的とし、体系的なカリキュラムと固定した教師陣を持つ神学教育機関』と定義する。したがって、自前の校舎を持っているかどうかは、この定義の要素には含まれない。また神学校や聖書学校という名称を付けても、信徒教育だけを目的とするものは含まれない。この定義に基づいて考察すると、一八七五（明治八）年に創立された同志社が日本最初の神学教育機関ということができよう。」⁸⁾との判断のもとに、1877年にブラウン塾その他を前身とする東京一致神学校が設立され、1878年に聖公会の東京三一神学校が設立されている以前に、設立されている同志社を日本最古のプロテスタント神学校であるとしている。そのカリキュラムは元より、卒業生の進路からして、余科は教職養成を目的として設立された神学校であった。

1880（明治13）年、英学校に日本語による付属速成神学科（教授会英文

記録では special theological class)⁹⁾が設置された。これは欧化政策の影響もあり、キリスト教界は追い風に乗って各地の伝道が活況となったことにより、伝道者養成が急務となったことを示している。そのため一定の社会経験のある者を短期間に牧師養成課程を修了させるためのものであった¹⁰⁾。

1878 (明治11)年に神戸ステーションのJ. L. アッキンソン (J. L. Atkinson) から受洗した19人によって設立された明石教会の第2代牧師川本政之助 (後に組合教会を離脱し、批判を展開) もこの速成神学科の卒業生である¹¹⁾。1882 (明治15)年余科内に特別科が設置されたが、社会事業家の留岡幸助はこの出身であった。1886 (明治19)年には英学校余科を廃止して神学専門科を設置し、英語神学科と邦語神学科の2つに分けた。1887 (明治20)年に邦語神学科を別科神学科と改称したところに、同志社が「英学校」であったということを再確認させられるが、翌1888 (明治21)年に同志社の全校を合わせて同志社学院と称した際に同志社学院神学部となり、翌年に同志社学院の名称を廃止するにあたって、神学部は同志社神学校と改称された。その年の11月には同志社は「同志社大学設立の旨意」を発表し、「基督教主義を以て徳育の基本」とする私学同志社の教育理念を公示した。1890 (明治23)年に新島は大磯で召されたが、1896 (明治29)年には「同志社宣教師総辞職問題」が起こった。元々開校当時、同志社について Kioto Training School としていたアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) とその宣教師たちは、同志社を日本組合教会の伝道者養成機関として物心両面で支援してきた。彼らの立場は「同志社大学設立の旨意」にも示されている通り、キリスト教主義に立つ総合大学の中に神学教育を位置づける新島とも常に緊張関係にあったが、新島の生前は、新島と宣教師団との強い信頼関係によって協力関係を維持するに至っていた。

しかしアメリカン・ボードと同志社の日本人教師たちの間で、建物の使用权、管理権やキリスト教主義教育の在り方について対立が起こったのであった。宣教師たちは同志社を離れ、今出川通の宣教師館に福音学館を開設し神学教育を行った。そのために同志社神学校は別科神学科を廃止して、同志社における神学教育を維持することに努めた。紆余曲折を経て、1900 (明治

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

33) 年に同志社神学校に宣教師たちも教師に復帰し、福音学館の学生も同志社に編入された¹²⁾。

1904（明治 37）年に同志社神学校を「専門学校令」により設置する件が文部省に認可され、課程を第 1 部と第 2 部に分け、各修業年限を 4 年とした。翌 1905（明治 38）年にはその 2 部制を廃止して、本科及び別課とした。1912（明治 45）年には、同志社専門学校と同志社神学校が合併し、「専門学校令」による同志社大学が設立された。これは神学部と法学部で構成され、神学部長には同志社神学校の教頭であった日野真澄が就任した。

1920（大正 9）年に「大学令」による同志社大学が設立されたが、神学部の設置は認められなかったため、従来の神学部は文学部神学科と改組され、1926（大正 15）年には神学科に神学専攻と倫理学専攻を設置した。ここに戦後に至るまで日本における唯一の大学神学科が同志社に誕生したのであるが、このことは後年、本稿で取り上げる日本西部神学校への統合拒否の際、一つの大きな理由となるのであった。

1922 年「専門学校令」同志社大学は同志社専門学校に改称され、神学部は同志社専門学校神学部となった。これは 1937（昭和 12）年に専門学校が廃止されるまで、神学部として「大学令」による大学文学部神学科と併存していた。この間、16 年間に 96 名が卒業し、60 名が各地の伝道に赴いたことは、当時大学神学科のみでは、教会の伝道者不足を解消することはできなかったことを示している¹³⁾。

1931（昭和 6）年 大学神学科内に社会事業学専攻が設置されたが¹⁴⁾、これは現在の同志社大学社会学部社会福祉学科の源流である。

アジア・太平洋 15 年戦争も、太平洋戦争勃発前にあたり、神学科は「東亜」における伝道を急務として 1941（昭和 16）年に神学科内に宣教医療養成課程と速成教師養成課程を設置した¹⁵⁾。同年、大学文学部の機構改正が行われ、同学部は神学科、英文学科、文化学科の 3 科へ再編され、倫理学専攻と社会事業学専攻は、神学科から分離し、文化学科哲学倫理学専攻と厚生学専攻になった。神学科は神学専攻のみとなった。これが戦時下に至るまでの神学部の変遷である。

2. 日本基督教団の成立と同志社大学神学科

キリスト教主義大学である同志社は、常にそのアイデンティティであるキリスト教主義と国家の間にある緊張関係の中に存在してきた。1880年代の欧化主義の波に乗ったキリスト教拡張期から1890年前後から始まる国家主義、国粹反動化の中で、1899（明治32）年の「文部省訓令十二号」において宗教教育が禁止されるなど、同志社も他のキリスト教主義学校同様に絶対主義的天皇制の元に置かれ、国策への順応を求められていった。そして1931（昭和6）年9月18日の柳条湖事件、それ以降の満州事変を発端として始まったアジア・太平洋15年戦争下、軍部と政府内における右翼の急速な台頭が、対外的危機感をあおりつつ、日本はファシズム体制を形成、国家神道を精神的基盤とした軍国主義、国家主義がデモクラシー、自由主義、個人主義の思想を一掃していったのであった。

その頃同志社では1935（昭和10）年岩倉にあった同志社高等商業学校で「同志社神棚事件」が起き、配属将校の引き上げ問題に発展した。当時配属将校の引き上げは、学生の徴兵猶予の特権はく奪と幹部候補生資格の喪失を意味した。結局、大学は軍部の意向を受け入れ、新島襄の肖像の代わりに武道場に神棚を掲げることを決定した。この時期、軍部や右翼の圧力は日増しに加えられて、総長であった湯浅八郎が退任に追い込まれることとなった。1939（昭和14）年には「国家総動員強化方策」が閣議決定され、すべてが戦争に動員される体制となり、1941（昭和16）年、同志社も時局に対応して寄付行為を改正し、総長事務取扱牧野虎次が「同志社教育の目的は皇国民の錬成であり、その目的を達成する爲には、基督教の精神を以て徳育に資することを明白にした」と述べたように¹⁶⁾、戦時体制に組み込まれていった。

この時代、同志社は同志社号と命名された戦闘機を献納している。これは軍用機献納運動という、15年戦争の入り口から敗戦直前まで続けられた、元々「銃後」のボランティアから始まった国民運動であり、延べ約1万の戦闘機が陸海軍に献納されたものの1機である。日本のキリスト教界からは海軍に2機（報国三三三八号、報国三三三九号）、陸軍に2機（愛国三三三一

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

号、愛国三三三二号)計4機の「日本基督教団号」がまず献納され、金城女子専門学校号として海軍に1機(報国二六二九号)、大阪女学院から1機(号数不明機)が献納、更に『教団時報』(1944年5月15日発行)によると「戦闘機『日本基督教団号』二機追加献納 = 都合累計八機献納=」とされている。日本のプロテスタント諸教派が戦時体制の中で合同した日本基督教団を通さずに独自に献納したものとして確認されているものは、献納団体名「同志社学生、生徒、職員及男子卒業生、女子卒業生 代表者氏名 同志社大学総長 牧野虎次」とされた同志社号(愛国三二二五号)のみである。1943(昭和18)年4月8日に岡崎公園運動場において天台宗一門などの献納機計6機の命名式が行われたが、献納機のその後の消息については記録が残っていない。ただ日本基督教団を通さずに同志社から献納された戦闘機の実在は、これから述べる同志社大学神学部教団立神学校への統合拒否とも性質的に無関係な話ではないであろう。

1941年6月、日本国内のプロテスタント33教派が合同して日本基督教団が成立した。明治以降に日本で活動を開始した各教派間の合同運動はそれ以前にもあったが、日本基督教団成立の直接的要因は、すべての宗教を総力戦体制下におくため1939年に制定された宗教団税法によるものである¹⁷⁾。日本基督教団は成立当初、各教派の伝統に基づく「部制」を採用しており、日本組合教会と、教師養成を同志社大学に委ねていた日本同胞教会等は日本基督教団第3部となった。

日本基督教団成立に至る教会合同準備委員会は1940(昭和15)年から1941年の間に8回開催されたが、その委員会において教会合同の懸案とされたのは、まず「信条問題」と「教団神学校」であった¹⁸⁾。宗教団税法に従い日本基督教団が宗教法人として法的に存在するためには、文部大臣による教団規則認可が必要であったが、1941年4月24日に規則草案を合同準備委員会は提出するものの、その審査は長引いた。そのため同年6月の教団創立総会時にはその認可を得ておらず、実際に認可されたのは同年11月14日であったが¹⁹⁾、認可を受けた「日本基督教団規則」の第二百八条一にはこうある。

補教師検定試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ
本教団ニ於テ一年以上信徒タリシ者ニシテ
左ノ各号ノ一ニ該当スルモノナルコトヲ要ス
一 別記教師養成機関ヲ卒業シタル者²⁰⁾。

ここで言う別記とは旧教派に関係する神学校を指している。日本基督教団の補教師となるための試験において、それらの神学校卒業生は科目の免除が第二百二十条で規定された。日本基督教団は1941年6月24-25日に東京・富士見町教会で行われた教団創立総会で発足したが、その創立総会において「教師養成機関研究委員会」が設置された。第1回教師養成機関研究委員会は1941年11月12日に開催、翌1942(昭和17)年、第2回研究委員会で、すでに決定されている「部制」解消を前提として「教団立神学校」の設置が要望され、男子神学校、女子神学校、聖書学校を東西各一校ずつ設置することを理想として意見が一致した。

1942年11月23日に行われた教団第1回総会において日本東部神学校、日本西部神学校、日本女子神学校の3校に各教派神学校を統合し、設置する決議がなされた。日本東部神学校には、日本神学校、青山学院神学部、日本ルーテル神学専門学校、東亜神学校の五つの神学校が合併し、1942年4月本郷中央会堂で開校、東光学院(旧救世軍士官学校)、日本一致神学校(旧一致基督教団神学校)が加わった。日本女子神学校には、青山学院神学部女子部、共立女子神学校、聖和女子学院神学部、東京聖經女学院聖書専攻科(旧日本福音教会系)、東光学院が合流した²¹⁾。西部神学校には関西学院神学部、同志社大学文学部神学科、聖書学舎(旧日本伝道隊系)、日本聖化神学校(旧自由メソヂスト系)の統合が計画されていたが、同志社は全国で唯一これを拒否するのであった。

3. 同志社はなぜ統合されることを拒否したのか

日本基督教団のこの統合案に対して、同志社は1943(昭和18)年「同志社大学神学科ノ日本基督教団ニ対スル関係ニツキテノ具陳書」(昭和一八年

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

六月二四日)²²⁾として、その見解を公にした。この「具陳書」は同志社大学神学教育後援会理事長松山常次郎と同志社大学神学科主任有賀鉄太郎の連名で発表され、なぜ西部神学校に統合されることを拒否するのかの理由が記されている。

その「一、神学校合同ノ経過」において、日本基督教団の成立を「基督教史ニ於テ特筆大書スベキ欣快事ナリ」「合同ノ結果トシテ各教派経営ノ教師養成機関ガ合同シテ新シキ教団立神学校ノ成立ヲ可能ナラシムベキコトモ亦理ノ当然ナリ」とした上で、

『日本基督教団規則』ニ於テハ同志社大学文学部神学科（大学令）、日本神学校（専門学校令）、青山学院神学部（男子部及女子部、何レモ専門学校令）、関西学院神学部（専門学校令）日本ルーテル神学専門学校（専門学校令）ノ五校ヲ教師養成機関トシテ認定シタリ

と同志社大学文学部神学科のみが「大学令」による設置であることをまず明示している。

「二、同志社大学文学部神学科が解消し得ざりし理由」では「同志社大学文学部神学科のみが解消せざりし理由」を4つ述べている。その要点は以下の通りである。

- ・同志社大学神学部が旧教派である日本組合教会の経営するものではなく、超教派であると共に、同志社財団が経営、資産管理していることから教派統合によって解消されるものではないこと。
- ・同志社大学神学科は、同志社創立以来のそのキリスト教精神の中核をなしているのであって、その廃止は精神教育の中枢を失うことを意味するので受け入れがたい。
- ・他の学問分野を擁する総合学園一学科として存在することは、伝道者養成に大切な条件である。
- ・最後に特に重要である部分として、

「同志社大学神学科ハ我が国に於ケル唯一ノ大学令ニヨル神学教育機

関ニシテ、之ヲ解消シテ専門学校令ニヨル教団立神学校ノミソソザイス
ルコトトナラバ我国ニ大学令ニヨル神学校ハ皆無トナルナリ」

すなわち同志社大学神学科は日本で唯一の大学令による神学教育機関である
るので、これを解消して専門学校令による教団立神学校になってしまえば、
日本に大学令の神学校がなくなることとなる。そのため

大東亜を指導すべき大日本帝国にとりて一大損失たるべきや必せり。す
なわち我国最高学府に於て神学の課程を修め得ずとすれば外地に派遣せ
らるる日本人教師は侮を受くる恐れあり、且外地より来る留学生を失望
せしむるなど、大東亜に於ける基督教徒指導上に支障を来すこと少から
ざるべし

と主張した。また附記としてすでに神学科は専門学校にはない特権として、
共学であることを加えている。

「三、同志社大学神学科と教団立神学校との関係」では教派と神学校の合
同に同志社は賛成しているため、神学科の解消には応じられないが、教団立
神学校のために校舎や設備の一切を利用してもらえるように同志社財団常務
理事会で決定したこと、しかしその提案は教団神学校委員会では採用されな
かったことを記している。しかし同志社大学神学科は教団立神学校に協力を
惜しまないこととして、西部神学校に大塚節治、魚木忠一両教授の出講を承
認し、女子神学校には森本芳雄講師を教理史及教会史教授とすることとし
た。この最後に

然リト雖モ地理的關係上往復約四時間ヲ要スル関西学院構内ニアル神学
校ニ之以上ノ協力ヲ為シ得ザルハ誠ニ遺憾ナリトス

とあることは興味深い。

「四、同志社大学神学科と教団との関係」では日本基督教団、そして大東
亜の精神的指導のために同志社大学神学科が「同志社八敍上ノ如キ事由ニ基

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

キ引続キソノ大学神学科ヲ維持・経営シ居ルモノニシテ、之ニヨリテ日本基督教団ノタメ又大東亜ノ精神的指導ノ為メニ貢献シ得ルモノト確信スルナリ。」「之ヲ指導スルニ足ル日本基督教神学樹立ノ必要ニ想ヒ到ルトキ、之ガタメニ同志社大学神学科ノ致シ得ベキ寄与ヲ誰カ期待セザル者有ラン。」として同志社が日本基督教団と大東亜の精神的指導のために貢献し、日本基督教神学の樹立に寄与するとした。

4. 『同志社新報』77号（1943年2月20日）の記事

「具陳書」を同志社大学神学科主任有賀鉄太郎と連名で提出した「同志社大学神学教育後援会理事長松山常次郎」は、当時衆議院議員であった。松山は先に同志社法人の理事に2月3日選出されているが、その報告は『同志社新報』77号²³⁾の2頁「法人理事幹事一部改選」の中で紹介されている。『同志社新報』の同ページには「同志社大学神学教育後援会理事長挨拶」として松山の挨拶文が続く。この中で松山は

同志社大学の神学科の使命につき過般も有賀教授は熱心に日本基督教神学の樹立にありと主張せられ私も心から共鳴致しました。日本精神に深く根底を下してこそ日本基督教神学は健全なる発達を遂げ得るものであります。私の見る所によれば日本精神の主流は我国学に存すると存じます。幸い同志社大学は総合学園でありますから、ここに国学科を新設せられ古典・国語・国史等の専攻を置かることを切望します。私の信ずる処によれば、我国学と基督教神学とは相容れ相輔け、相補ふて大東亜建設乃至世界新秩序招来の大使命を完遂するものであります。

とする挨拶文を寄稿している。その記事に続いて「同志社大学神学教育後援会設立趣意書」が紹介されている。

同志社大学神学科は新島襄先生が、我国に、基督教精神を普及徹底せしめ、以て新日本の向上に貢献せんとせられし、至誠に発源したるものに

して、既に数百の伝道者、教育者、社会事業家を排出せり。^{じらい}爾来七十年
我国神学教育の最高峰として日本精神界並に日本文化に対するその貢献
は、自他共に之を明識するところなり。

今や大東亜共栄圏確立の時代に当り我が同志社神学教育の振興を期待す
る^{まこと}洵に大なるものあり。学内又は諸機関を充実し、本科の目的を完遂す
るの急務を痛感するに至れり。即ち

- 一、日本基督教神学の樹立
- 二、神学の学的權威の高揚
- 三、基督教精神の国民生活への徹底
- 四、日本思想の発展に対する基督教神学の寄与
- 五、大東亜共栄圏の指導・教育に対する貢献

等は同志社神学科の追うべき重責なり。されば本後援会の事業は、日本
基督教団の発展に対して、多大の貢献を為すものたるを信じて疑わず。
是、吾人が同志社大学神学科後援会を組織し、多大の援助を同科に寄与
せんと欲する所以なり。

^{こいねがわ}冀くは本趣旨に御賛同の上御参加入会あらんことを。

昭和十八年二月十二日 同志社大学神学教育後援会発起人

さらに 77 号には「同志社大学神学後援会発会す」との記事が並んでいる。

同志社大学神学教育後援会発会す

新日本神学の樹立に拍車

同志社大学文学部の神学教育振興の件に就ては従来よりも富森神学科
主任、同志社当局、旧組合教会、旧同胞教会当事者等の間に於て永年努
力せられて来た處であるが、今回各派教会の合同を機会に有志に依り
愈々後援会の結成を見、去る二月十二日、新島先生誕生記念日を期して
同志社本部で発会式を挙げ上記設立趣意書を公にした。参列者は全国に
散在する神学科卒業生中の代表約八十名。遠藤作衛氏司式の元に山口金
作氏の発会主旨説明、規約に関する議事、松山理事長のあいさつ（代
読）、安藤副理事長挨拶、今泉眞幸氏の祝辞、牧野同志社総長の『日本

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

『基督教と新島先生』と題する講演あり、閉会后新島先生遺品庫を縦覧した。

この講演会の設立について『同志社百年史』は「同志社の神学科を存続せしめようという願が、講演会発足のモチーフであったことは確かだろう。」²⁴⁾としている。また土肥昭夫はこう述べている。

同志社が大学令による唯一の神学科であることをのぞけば、青山、関学も、これらの条件は同じである。これらの神学部がどういう意図と動機で教団立の学校に整理、統合されることを承認したかは、あきらかではないが、おそらく部制解消による教団体制の強化に神学校も協力しなければならぬと考え、これらの条件を放棄したと思われる。では同志社がそれを放棄せず、あえて主張していった背後の原因が問われねばならない。結局、同志社はかねてより教職養成のみならず、学問研究を重要視し、神学専攻のほか倫理学専攻（一九二六・四）、社会事業学専攻（一九三一・四）をおくなどして、多様性に富む神学教育をおこなってきており、いきなり教団の教職養成だけに統合されることにためらいを感じたこと、現下の情勢なかでは教団と命運をともにするよりも、設立以来きつてもきれない同志社にとどまる方が有利と判断したことが、その根本的な理由であろう。しかし、このことは同志社が決して教団の統制路線に抵抗したとか、ましてやその背後にある国家権力の支配体制に批判的であったことを意味しない。教授たちは西部神学校の講師となり、「大東亜新秩序の盟主たらしめる我が国基督教会の指導者養成」（前記の事歴にあることば）に専念した。むしろ体制に順応して、自己を保存していこうとする姿勢のために、教団立神学校に整理、統合されることを拒否したといえよう。²⁵⁾

この評価は妥当であると考えられる。同志社は国策に抵抗して、西部神学校への統合を拒否したのではないであろう。同志社は他の日本におけるキリスト教主義学校と同じく、1890年前後から確立されていった絶対主義的天皇制

に基づく国体との緊張関係に常に置かれてきた。もちろん前提として語るべきは、日本がプロテスタント教会と出会ったとき、そこで入信した人々は、キリスト教をもって新たな日本を創るという精神をその多くが持っていた。しかし日本がファシズムに次第に突入していくにあたり、土肥が別途述べるように「一定の組織として自己を維持してきた教会や学校はそれをつぶされまいとして、状況に応じた再編を行うことによって必死に生き延びようとした」²⁶⁾のであった。

前坂俊之は戦時下におけるメディア（新聞、出版、放送、映画など）の置かれた状況について「三段階で急変化した。戦争拡大に向かってアクセルが踏まれる段階で、言論、報道の自由は三段ブレーキが次々にかけられ太平洋戦争と同時に報道の自由は完全にストップした」²⁷⁾と述べているが、これをキリスト教主義学校に当てはめると、それぞれの学校の礎である建学の精神、創立者の信仰を自由に語ることは段階が上がるにつれ困難を極め、国体に順応したものを表明していったのであった。この時代、日本のキリスト教界はホーリネスの一部などを除き、戦時体制への協力を惜しまなかった。しかしそれは日本全体がそうであったのであって、それに公に抵抗することなど出来うる時代ではなかった。それほど国家総動員体制、それを支える人々の熱狂は凄まじかったのであるが、同志社は国策に順応しつつも西部神学校に再編されることを拒否したのであった。これにより同志社大学神学科は実際には学徒動員後、神学校としての機能は停止していたものの、戦時下において唯一単独で存続したプロテスタント神学校であったのであった。

5. その際語られた「新島精神」

「同志社大学神学教育後援会」発会にあたり、牧野虎次が講演した「日本基督教と新島先生」は『基督教研究』第20巻3号に収録されている。牧野はその講演の冒頭、「日本基督教の磁石としての新島先生の存在意義に就き、申し上げたい」としつつ、新島の人となり、（新島遺品庫 No.下 0085）1883（明治16）年12月31日付で板垣退助に新島より送られた書簡の一節を引きつつ、

我登用に新民を隆興せしめんと存じ、新民は乃ち新心を抱く者なり」やいくつかの新島による書簡を挙げ、「以上述ぶる所を総合して考えますと、我国に於ける大東亜問題精神的指導の最初の提唱者は実に新島先生であられたのであります。』²⁸⁾と述べている。さらに「私がここに申し上げ度い要点は、先生の『生か死か』『佐幕か勤皇か』の問題を解決せしめ、忠孝一如の道を歩ましめたものは基督教であったと言ふ一事であります。先生は此の大問題を基督教に依って完全に解決せられました。かの、先生はこの教に依って東洋指導の道を拓かんとせられたのであります。先生は狭隘なる儒教的孝道より飛躍せられ、基督教の示す忠孝一如の妙諦を体得せられたのであります。』²⁹⁾「東亜十億の民を日本が指導するに当たっては、彼らに何を与ふるかの問題に到っては、新島先生の理想に依って指導する外はありませぬ。我等は東洋の爲、下積になる覚悟を要します。新秩序建設のため捨石とならねばなりません。ここに日本基督教神学が芽生えて来ねばならぬと信じます。³⁰⁾

と続けている³¹⁾。

牧野が当時語った新島の精神は、大東亜共栄圏構想と関連して語られたものであった。またここに登場する「日本基督教」は「同志社大学神学教育後援会設立趣意書」にも見られた言葉である。日本基督教とは、1930年代に「日本のキリスト教」が用いられたが、他に「日本神学」、「基督教日本」、「ジャパニーズ・イスラエル主義」などとも記され、キリスト教の教説を日本的伝統と様々な方法で関連づけて理解しようとする試みのことを指した。アジア・太平洋15年戦争下に国民の精神的統合を図るために、非常時、国体明徴、皇道精神の振興を政府は唱えたが、その中で古典や神道、その他の歴史的伝統の再評価がなされ、キリスト教を外來宗教として排撃する一方で、その日本化を求めて国策に奉仕させようとする動きも現れた。この相矛盾する社会的風潮の中で、キリスト教指導者の中にはキリスト教を日本民族の精神的伝統と積極的に関連させて理解しこれを説き明かすことによって、キリスト教が国体と相反するものではない、という自己弁護を行おうとした者もいたのであった。日本的基督教はその所産と言えるが、それは必ずしも

一様ではない³²⁾。

同志社において、日本的基督教の論壇の中心にあったのは神学科の魚木忠一であったが、牧野の言説もこの魚木の影響を受けている。魚木は1941年に『日本基督教の精神的伝統』1943年に『日本基督教の性格』を出版しているが、『日本基督教の精神的伝統』の中で、小崎弘道のキリスト教理解を例にあげて儒教とユダヤ教、儒教の究極と天国の教理、儒教でいう君父とその仁愛の近似性を述べて、この意味でキリスト教は儒教を完成すると説明し、「万世一系の天皇を仰ぎ奉るわが国に於てこそ、基督教が理想とする忠孝信一如が最も完全に体得されるのであって、之が日本類型の他に比すべきものなき特質で」とした。このような日本のキリスト教にとって重要なことは「明瞭な国民意識に立つことである。(中略)真に日本といふ意識をその内に包蔵する日本基督教が生まれる為には、国民の宗教精神が直接に触発するのでなければならない。(中略)此意味に於て、日本基督教は、わが国固有の宗教なる神道との密接なる関係に立たねばならない。だが、それは習合や折衷であってはならぬ。神道にとって習合は禍であり、永年に亘る習合の悪癖を脱却する為に起ったのが、国学者の運動であった。(中略)基督教にとっても習合は致命的な不幸である」とし、「神儒仏三教により育成された大和民族の宗教精神の触発によって成るのが日本基督教である」と結論づけた³³⁾。魚木は1940年に「新島先生永眠五〇周年記念事業」の講演会で「教育の源流として見たる新島先生」という題で講演をしているが、これについて『同志社百年史』は次のように記している。

魚木の右の講演は、『新島先生が明治の実利主義的大勢に抗して勇敢に標榜せられた精神主義は、儒教によって洗練された我国の伝統的精神主義を、基督教によって深めたものであった』といった解釈をおこない、そういう新島に対して、福沢諭吉の教育思想は、精神主義と呼ぶのは正しくないと断定したものである（『新報』第四四号に全文掲載）。両者の対比に関するかぎりにおいては、魚木の見解は誤りとはいえない。しかし、伝統的な儒教倫理を前面に押し出した解釈は、新島の一面を誇張したものであり、やはり時代の影響がかなり濃く影をおとしていると言わ

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

ざるをえない。『斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、又た既に人心を支配するの能力を失ふたる儒教主義の能くす可き所に非ず』（「同志社大学設立の旨意」といった新島の一面には、まったく言及していない。同じときの難波の講演は、右の『同志社新報』に概要が紹介されているだけだが、それによると、『(新島)先生の精神要素を日本武士道の死して生きる精神と基督教の十字架愛の結晶』としてとらえ、その精神は『昭和維新即ち新東亜建設に当って如何に重要な役割を果すか』を、難波は強調したようである。魚木以上にその解釈はゆがんでいる。

こうした講演が行事のプロローグを飾っていることは、おそらく新島五〇年記念行事の性格を、大なり小なり象徴的に物語っているはずである。純粹に新島追悼の行事を遂行し、新島の全体像とその念願を正しくとらえなおすには、時代的狀況があまりに悪化していたといわねばなるまい。³⁴⁾

と魚木について記し、さらに魚木に続いて「新島精神の現代的展望」として講演した同志社専門学校校長難波紋吉についても言及している。魚木の日本の基督教については、時代的限界を認めつつも、当時の皇道主義者などのものと同様に扱わずに再評価もされている³⁵⁾。ただし「新島精神」の取り扱い方については、やはり国策に順応する形で解釈がなされており、戦後同志社において『同志社百年史』が『同志社設立の旨意』といった新島の一面には、まったく言及していない』と指摘している通りである。

むすび

その歴史を見る時、筆者はそのために語られた言説への評価よりむしろ、今日に生きる私たちの「これから」が問われていると考えている。

新島精神とは何か、本論では神学科の西部神学校への統合拒否の歴史と、その際語られた新島精神について見てきた。この時代、さらに多くの人々によって、「新島精神」が語られている。例えば徳富蘇峰も 1936 (昭 11) 年に出

版した『史論新集』の中で「新島精神と日本精神」³⁶⁾を書いている。キリスト教主義が後退せざるを得ない時代にあつて、それに代わる「新島精神」が如何に語られたのかについての比較検証も必要であろう。

時代的制約や、潮流の中で、新島のある一面を強調してきた歴史を見てきたが、これはいつの時代においても、起こりうることである。創立者の思い、言葉、信仰を時代の風に流されるのではなく、いかに創立者に立脚し、語っていくことが可能なのかであろうか。新島について言えば、彼はキリスト教の牧師であり、教師であった。「同志社大学設立の旨意」にもあるように、キリスト教が同志社、その建学の動機である。その彼の信仰と切り離して、その言葉を切り取り、「新島精神」を語ることは、その言葉の基底と切り離して語ることになり、誤用につながる可能性が高い。勿論キリスト教、と言ってもそれ自体解釈可能であり、多様なものである。さらに言うならば、新島から直接の薫陶を受けた人々においても、新島に対する解釈、受け止め方は様ではない。だからこそ新島のキリスト教観、信仰について、もう一度今日的な限界があることを知りつつ、見つめなおさなければならないし、学び続けなければならない。

最後に牧野虎次について少し触れたい。神学科の西部神学校への統合を拒否した際の同志社総長であった牧野に対して、何とか同志社を存続させた功績と、それによって本論でも触れたように新島の精神を当時の国家観と結び付けて、解釈していたことへの批判などが戦後の研究の中で展開されてきた。牧野は新島襄から直接の薫陶を受けた最後の同志社総長であった。

新島は日本基督一致教会と日本組合教会の合同に真っ向から反対した。その実際についても今後さらに研究を重ねていくべきであるが、新島は同志社の礎でもある会衆主義が、その合同によって損なわれることを危惧した。新島のその独立への「気概」に、牧野はその学生時代、同志社において肌で触れたに違いない。これは本論で語ってきたこととは別のものとして、牧野の中に生きていた自治・独立の「新島精神」を、同志社大学神学科の西部神学校への統合拒否に際しても、見ることはできないだろうか。

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

注

- 1) 同志社々々史料編集所編『同志社九十年小史』（同志社、1965年）、pp.308-348
- 2) 「五 新島襄宛田中不二麿書簡」同志社社史史料編集所編『同志社百年史 資料編 1』（同志社、1979年）、p.5
- 3) 同志社大学人文科学研究所同志社社史資料室編 *Doshisha faculty records, 1879-1895*（同志社社史資料室、2004年）、p.5
- 4) 『小史』、p.308
- 5) 同上、p.311
- 6) *Doshisha faculty records, 1879-1895*、p.5
- 7) 『小史』、p.308
- 8) 中村敏『日本プロテスタント神学校史－同志社から現在まで』（いのちのことは社、2013年）、p.4
- 9) *Doshisha faculty records, 1879-1895*、p.23
- 10) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）、p.932
- 11) 同上、p.27
- 12) 同上、p.932
- 13) 『小史』、p.325
- 14) 『同志社百年史 通史編 1』（同志社、1979年）、p.840
- 15) 『小史』、p.328
- 16) 『同志社百年史 通史編 2』（同志社、1979年）、p.1168
- 17) 宗教団体法の全文は文部科学省の HP で確認することができる。
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318168.htm（最終確認日 2022年10月25日）
- 18) 同上、pp.82-83
- 19) 日本基督教団宣教研究所『日本基督教団史資料集 2 戦時下の日本基督教団 1941-1945年』（日本基督教団出版局、1998年）、p.15
- 20) 同上
- 21) 同上、p.83
- 22) 『同志社百年史 資料編 2』（同志社、1979年）、pp.1707-1710
- 23) 『同志社百年史 資料編 1』に収録されている。
- 24) 『同志社百年史 資料編 2』、p.1200
- 25) 土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』（日本基督教団出版局、1975年）pp.255-256

- 26) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社、1980年）、p.331
 - 27) 前坂俊之「太平洋戦争下の新聞メディア」『マス・コミュニケーション研究』66巻（日本マス・コミュニケーション学会、2005年）、p.5
 - 28) 牧野虎次「日本基督教と新島先生」『基督教研究』第20巻3号（基督教研究会、1943年）、p.193
 - 29) 同上
 - 30) 同上、p.196
 - 31) 戦後、牧野は当時のことを以下のように回顧しているが、ここには戦中と戦後の隔たりが見られる。牧野虎次『針の穴から』（牧野虎次先生米寿記念会、1958年、pp.108-109）から引用する。

「今にして思えば満州事変以後、日本の政界が大揺れにゆれ出すと共に、我同志社もそのあほりを受けずには居られなかったのである。海老名総長時代の末期から大工原総長時代に到り、表面は無事と見えて居た計りでなく、湯浅総長時代の創立六十周年記念事業の如き大成功であったが、実は危機はその頃から孕んで居たのである。否な、同志社は創立時代から異端視せられ通してであった。それはその筈で基督教と自由民権とを標榜して起った新島襄先生が、富国强兵主義を一枚看板にする明治政府を始め、朝野の識者の輿論に受け容れられる筈はなかった。先生は板垣退助伯の如き、当時の最も進歩せる思想の持主に対してすら、その眼界が国内に限られてあるのを憂いて、眼を東洋各国の現状に転ぜよと進言せらるると共に、更に精神的革新の必要を迫り、『新民は須らく新心を抱くべし』と主張せられた程である。（明治16年12月30日附、板垣退助伯宛、長文の書翰参照）明治政府の富国强兵主義は後世の軍国主義や皇室中心主義となり遂に日本帝国を亡ぼすに到ったことは事新らしく論ずるまでもないが、その間基督教と民主主義を標榜せる同志社が、官憲や軍部の圧迫を受けたのは已むを得まい。」
 - 32) 『日本キリスト教歴史大事典』 p.1063
 - 33) 原誠『国家を超えられなかった教会：15年戦争下の日本プロテスタント教会』（日本キリスト教団出版局、2005年） pp.58-60
 - 34) 『同志社百年史 通史編2』、pp.1169-1170
 - 35) 『国家を超えられなかった教会』、p.60
- 原は魚木の見解について、「たとえ今日の時点から見て用語の問題などにおいて問題を感じるところがあるにせよ、たんに時代の時流に乗って迎合してキリスト教を天皇制国体と結びつけようとしたのではなかった。魚木はキリスト教が歴史の中でどのように成立し展開するかについて考究をすすめる、その意味では後の『キリスト教の土着化』論や今日の課題にも通じる視点のひとつを提供したとい

同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、その際語られた「新島精神」

うべきである」と評する。

36) 徳富猪一郎『史論新集』（民友社、1936年）、pp.319-362